

法の街・六本松 始動

福岡の裁判所移転

学生街 転換 「地域挙げて歓迎」

福岡高裁、地裁、簡裁が20日、九州大六本松キャンパス跡地(福岡市中央区六本松)に完成した新庁舎で業務を開始した。来年には検察庁と福岡県弁護士会も付近に移転する予定。約10年前に同キャンパスが閉鎖され、にぎわいに陰りが出ていたかつての「学生の街」は、「法曹タウン」として息を吹き返している。

■心機一転
20日朝、地上12階、地下2階の真新しい新庁舎に、裁判所職員らが次々に出動した。この日から窓口業務などが始まった。27日には福岡家裁も同じ庁舎で業務が始まり、高裁、地裁、簡裁、家裁が一体化した全国

初の裁判所庁舎となる。ある男性職員は「市民の方に利用しやすい裁判所を目指し、心機一転頑張りたい」と意気込んだ。今後1週間ほどは移転作業に充てられ、実際の裁判は来週以降から始まる見通しだ。

■再開発加速
「街を挙げて歓迎します」六本松地区で今年創業55年となるメカネの光和堂社長で、六本松商店連合会長の大島達男さん(56)は目を細める。

約6000人の学生や教職員を抱える同キャンパスを核に発展してきた六本松。昼間は定食屋の前に学生が列を作り、夜は教授らが居酒屋にゼミの学生を引き連れて議論に花を咲かせていた。しかし、2009年に閉鎖されて以降、飲食店の廃業やワンルームマンションの空き部屋が増えていた。

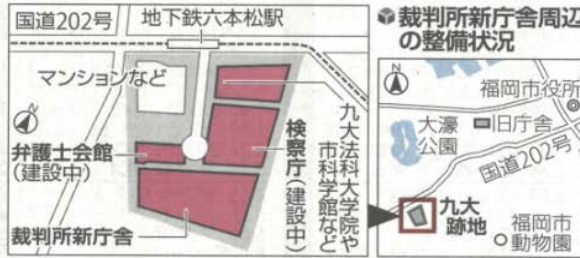
だが、再開発が進み、昨年9月には同キャンパス跡地に複合ビル「六本松4+1」が開業。分譲マンションも建て飲食店の新規開店も進んだ。来年には福岡高検や地検などが入る庁舎と福岡県弁護士会館が完成予定で、街は様変わりしている。

同連合会は今回の裁判所移転で、職員などを含め、昼間の人口が1000人以上増えるの見込む。近くでインド料理店を営む杉林充英さん(51)は「特に平日のランチ利用が増えれば」と期待する。

■懸念はねのけ
地元の草ヶ江校区まちづくり協議会によると、裁判所移転には当初、住民から「刑事事件の傍聴に暴力団員が来て治安が悪化しないか」「訴訟を巡るデモの騒音が心配」などと懸念する声も出ていた。そこで裁判所見学などを行い、「緑豊かな新庁舎にしてほしい」といった要望を、裁判所側や跡地再整備を担う都市再生機構(UR)に伝えてきた。同協議会会長の小松至誠さん(81)は裁判所新庁舎を眺め、「開放的で美しい。移転に否定的な住民はもういないだろう」と喜ぶ。来年、新庁舎前に九大箱崎キャンパス(福岡市東区)のクローマツ3本を移植する。六本松という地名にちなんだ同協議会の発案で、ここに九大があった歴史を刻み、「行政、民間、住民の3者で町づくりを進めた象徴」との願いを込めたという。



●裁判所の移転など再開発が進み、六本松の街は様変わりした。中央奥が裁判所新庁舎(20日午前7時50分)●裁判所新庁舎に出勤する職員たち(20日午前8時13分、福岡市中央区六本松で) ●いずれも久保敏郎撮影



現在、福岡市内にある弁護士事務所の大半が旧庁舎そばの中央区赤坂や警固、舞鶴などに集中している。ただ、多くが移転については「検討中」という。ある弁護士は「実際にどのくらい不便になるのか確認したうえで、移転の費用対効果を見定めようという弁護士が多い」と話す。

三好不動産(福岡市)売買営業部の堂脇善裕部長は六本松について、「昨年9月に九大法科大学院も移転

初め、2009年に閉鎖されて以降、飲食店の廃業やワンルームマンションの空き部屋が増えていた。しかし、2009年に閉鎖されて以降、飲食店の廃業やワンルームマンションの空き部屋が増えていた。

弁護士は移転様子見

「一方、一部の地価がこの5年で6割以上上昇していることを踏まえ、「オフィスビルを造る不動産業界などは、弁護士事務所などの需要がどれほどあるのか、見極めているようだ」とみている。